

宇和島藩祖秀宗 奮闘の生涯

1. はじめに

かつて江戸時代も初期、慶長 19 年（1614 年）12 月 28 日、大坂冬の陣に父の伊達政宗と共に陣していた伊達秀宗は、将軍秀忠より伊予宇和島 10 万石を拝領した。以来、伊達家は 9 代 250 年にわたり宇和島の地を治めた。この伊達家は仙台藩の支藩ではなく、れっきとした国持大名格であり、「西国の伊達、東国の伊達と相並ぶ」よう命じられたと言う。だが、これを支藩とみる仙台藩とは大きくしゃくした関係が長く続いた。一方、入部前の宇和島は領主の交替が頻繁で、領地は荒廃しており藩政は多難であった。

秀宗の奮闘の中でようやく宇和島の藩政は確立していったのである。彼の死後も天災や飢饉など藩政は苦難の連続だったが、何とかこれを克服して 250 年にわたる統治を維持したのである。今回は初代宇和島藩主秀宗に焦点を当てて、あまり注目されることの少ない彼の生涯を通して、宇和島藩草創期の苦難の道を顧みてゆきたいと思う。

2. 東北の雄政宗と秀宗の誕生

父である伊達政宗は永禄 10 年（1567 年）出羽の国米沢城で 16 代当主輝宗の嫡男として生まれた。13 歳の時に三春城主田村清顕の娘である愛姫を正室に迎えている。天正 13 年（1585 年）家督を相続し、17 代当主となった。天正 15 年（1587 年）豊臣秀吉は関東、奥羽の諸大名に対して惣無事令を出して私戦禁止を通達したが、政宗はこれを無視し、同 17 年（1589 年）には会津の輩名義広を磐梯山麓で破り（摺上原の戦い）、南奥羽の広大な地域を領有するに至ったのである。若干 23 歳にして、領国はおよそ 114 万石であったとされる。

秀吉は政宗に対して上洛し恭順の意を示すように再三要求していたが、北条氏との関係もあり態度を明確にしていなかった。しかし、天正 18 年（1590 年）小田原攻めが開始されると、浅野長政から催促の書状が届く。これを受けて政宗はついに参陣を決意して会津を出立したのである。途中、越後、信濃、甲斐を経由して実に 4 か月もの遅参となった。政宗は伊達家の本領 12 郡 72 万石は安堵されたものの、会津領は没収されて蒲生氏郷に与えている。そののち、秀吉による奥州仕置きにより新たな領主となった木村氏に対して、改易となった葛西、大崎氏らの旧臣が反乱を起こした。この一揆を扇動したとして政宗はまたも疑われて窮地に陥った。ようやく許されたものの本領 12 郡のうち、6 郡（長井、信夫、伊達、安達、田村、刈田）44 万石を没収され、荒廃した葛西・大崎 30 万石を得たものの所領は 58 万石と減封となったのである。

秀宗が生まれたのは、天正 19 年（1591 年）9 月 25 日父が 58 万石に削減されて岩出山城に移ったところである。若き政宗も 2 度にわたる減封を受け心身ともに窮地に陥った時で、側室である飯坂宗康の娘、新造の方との間に念願の長子が生まれたのは大きな励みになったことであろう。文禄 3 年（1594 年）3 歳の秀宗は政宗に伴われて聚楽第で秀吉に拝謁し、母新造の方とともに伏見に移っ

た。翌年、秀次事件が起きると秀次と親しい政宗はまたも嫌疑を受けたが、家康の仲介で何とか乗り切っている。その翌年、秀吉の猶子となり偏諱（へんき）を受けて秀宗と名乗ることになった。豊臣秀頼の側小姓に取り立てられることになったのである。慶長5年（1600年）関ヶ原の戦いの時には西軍の人質となり、宇喜多秀家の屋敷に捕らわれている。さらに2年後には家康に拝謁し今度は江戸に移ったのであった。同年、政宗と正室愛姫との間に弟、虎菊丸が誕生した。のちに江戸城で元服し、秀忠から1字賜って忠宗と名乗ることになり、本家の家督を継ぐことになったのである。この結果、豊臣家と縁の深い秀宗は伊達家の後継から除外されたのであった。慶長14年（1609年）、秀宗は家康の命で、井伊直政の娘亀姫を正室に迎えることになったのである。

3. 秀宗入部前の宇和島

愛媛県の南部は南予地方と呼ばれている。かつては宇和郡（うわごおり）と呼んだが、藩政時代にあっては大洲藩6万石、新谷（にいや）藩1万石、宇和島藩10万石、吉田藩3万石の4つに分かれて統治されていた。戦国期以前は海賊が活発に活動しており、宇和島の西方にある日振島を根拠地として天慶2年（939年）藤原純友が反乱を起こしたのであった。こののち室町期になると、足利幕府から藤原北家傍流の西園寺氏の知行となったが、周辺の大内氏、毛利氏、大友氏、山内氏などの侵略を受けて戦乱の時代が続いていたのである。

豊臣秀吉の四国攻めにより伊予は小早川隆景に与えられた。彼はのちに北九州に領地を与えられて、新たに秀吉の母衣衆（ほろしゅう：親衛部隊）の戸田勝隆が大洲10万石の領主となったのである。司馬遼太郎の『南伊予・西土佐の道』によると「宇和島での行状を見ると戦場の殺人鬼が血ぬれた手のまま行政者としてやってきたような観がある」と述べている。彼は天正16年2月当時板島丸串城と呼ばれた宇和島城に入ると、抵抗する一揆勢を捕えてこれを処刑したのであった。戸田は文禄の役で渡海した。講和交渉を終えて、帰国の途上、巨濟島で狂死したと伝えられる。嗣子がなく戸田家は断絶したのである。その後、文禄4年（1595年）藤堂高虎が宇和郡7万石の領主となった。彼は板島丸串城を6年をかけて辺2辺を海に、3辺に堀を備えた不等辺5角形の城郭を完成させたのである。慶長5年（1600年）関ヶ原の戦いで戦功のあった高虎は伊予半国20万石を加増され今治に転出し、その後伊勢、伊賀32万石に栄転したのであった。

慶長13年（1608年）伊勢安濃津5万石より富田信高が宇和郡10万石を与えられて、板島丸串城に入った。彼の父、知信は秀吉の側近であり、秀吉の死後、旧主を偲んで描かせたものが今に伝わる有名な肖像画である。これは今、宇和島の伊達文化保存会に所蔵されている。信高は関ヶ原合戦の直前、安濃津城の籠城戦で西軍に降伏したものの戦後にその功により加増されて板島城主になったのであった。だが、5年後坂崎出羽守との訴訟に敗れて、富田氏は改易となってしまった。最近では大久保長安事件に連座したのではないかと、とも言われている。もし、そうだとすれば、これには大久保が仕えた松平忠輝、彼の舅の政宗、さらには豊臣家とキリシタン勢力の連携など大きな歴史的背景も見え隠れするが、事実定かではない。富田氏改易で宇和郡は幕府の直轄領になり、代官として藤堂良勝が入った。このように宇和島は頻りに領主が交替し、領地は疲弊の極みにあったのである。

4. 秀宗の宇和島入部

慶長19年（1614年）秀宗は父政宗とともに大坂冬の陣に出陣した。12月28日、伊予宇和島

10万石を与えられたのである。関ヶ原合戦の時、家康より自軍に味方すれば百万石を与えるという「お墨付き」をもらっていたが、戦が1日で決着し、どさくさ紛れの行動（和賀一揆）が咎められて約束は反故にされた経緯があった。今更の10万石ではあったが、秀宗の身の振り方に腐心していた政宗にはありがたかったに違いない。その一方で幕府には伊達の力を東西に二分する狙いもあったとも思われるのである。慶長20年3月、秀宗は家臣団「五十七騎」とともに板島丸串城に入城した。家臣団は家老として、桑折（こおり）左衛門（7千石）、侍大将桜田玄蕃（千九百石）、惣奉行山家（やんべ）清兵衛（千石）、江戸定御供に神尾勘解由（3百石）などがあつた。

もとより宇和島はリアス式海岸で険しい山岳が海に迫っており、大きな川もなく干害と洪水には悩まされ続けていた。米は不足しがちで、苦しい財政のためにはハゼ（ロウ）や泉貨紙などの生産物にも税を課した。また、漁村には干鯛（ほしか）を奨励して、これにも課税したのである。それでも、新たな支配層と土豪ら地元の領民との間は緊張関係が続いていた。隣国の土佐では長曾我部氏の旧臣たちが新しい藩主の山内氏に対して一揆を起こしている（浦戸一揆）。宇和地方でも秀宗入部の年に暴動が頻発していた。領主に反旗を翻したのは、農村では一領具足、漁村では村君と呼ばれた中間支配層たちであつた。彼らは実質的に地方を支配しており、新たな支配層が村々までその支配が及ぶことはさすがに困難であつたらう。このような中で、桑折、桜田、山家らを従えて始まつた領国の経営は困難を極めたのである。

元和3年（1617年）ごろ、板島は宇和島と呼ばれるようになった。宇和島入部に際して政宗は秀宗に創業の資金として3万両（6万両とも言われる）を貸し与えたといわれている。この返済を巡って藩論は紛糾した。最終的には山家清兵衛の提案により政宗隠居料として知行のうち毎年3万石を政宗に献上することになった。実に政宗が死ぬまで仙台藩に18年間にわたって払い続けることになったのであつた。それでも宇和島藩の表の石高は10万石であつたので、幕府からはそれに見合った普請や賦役を担わされることになった。新田開発を進めるとともに、ハゼや紙など各種生産物の増産に努め税収の増加を図っていった。秀宗の入部はこのように幾重にもおよぶ苦難のうえになされたのであつた。

5. 和霊騒動

大坂夏の陣ののち、元和5年（1619年）から秀宗は大坂城の石垣普請を幕府から命じられた。これは藤堂高虎が縄張りを担当する大掛かりなものであり、豊臣氏の大坂城を埋めた上に新たに城を築いたのである。石高に応じて扶持米は支給されたものの、それは一部を補うに過ぎず、各藩とも財政難に苦しむことになったのである。工事担当の家老、山家清兵衛と桜田玄蕃は秀宗に金の工面の書状をたびたび送っていたのである。これに対して秀宗は、事情は理解するが宇和島でも大坂に送る米も大豆もない、扶持米すら手当てできていない以上、現地で何とか（金策を）してほしい、というほど深刻な状況に陥っていた。これらの負担は最終的には農民や漁民の肩に重くのしかかっていたのである。一方、家臣たちも困窮の中にあつた。農民たちを救うとなると、財政改革を進めていかねばならず、これは必然的に家臣団の強い反発を招いたのである。そして、藩内に深刻な対立をもたらしたのであつた。

秀宗は宇和島入りの際、政宗から多額の借金をしたが、この返済を巡って藩論が紛糾した時に、3万石を政宗隠居料として毎年返済に充てるという案を主張したのは山家清兵衛だつた。この結果、家

臣たちの扶持米は減り、次第に反山家の雰囲気醸成されていったのである。もとはといえば辣腕を見込んだ政宗が秀宗の補佐にと送り込んだ人事ではあったのだが、秀宗からすれば相当に煙たく感じたことは想像される。藩を揺るがす大事件が起こる背景にはこのような事情があったのである。

こうした状況の中で大坂城普請については秀宗への報告を巡って山家、桜田の間に対立が起こり、桜田は山家を訴えたという。山家清兵衛は宇和島に帰り弁明のち謹慎した。桜田一派が山家を襲ったのは元和6年（1620年）6月29日（30日とも）の雨降る深夜のことである。清兵衛と次男、3男、そして隣の娘婿の塩谷内匠とその子2人が斬殺、さらに9歳の4男は井戸に投げ込まれて殺されたのであった。この事件発生とき、桜田玄蕃は大坂におり、直接手を下してはいない。が、この件について、もし怨恨ならば責任を追及されるべきところをなぜか一切問われていないのである。事件を知った政宗は激怒した。秀宗とは親子の縁を切り、幕府に宇和島藩の改易まで訴え出たというがさすがにそれは慰留されたという。秀宗も慌てて、妻の実家である彦根の井伊直孝や老中土井利勝、柳生宗矩を通して仲介を依頼し、危うく改易を免れたのであった。

事件から10年ほどのち、寛永9年（1632年）秀宗正室亀姫（桂林院）の3回忌法要のとき、大風が吹いて金剛山正眼院の梁が落下して桜田玄蕃が圧死した。その後事件関係者が次々と変死したのである。秀宗も中風の発病、長男の死、台風、飢饉が続いたのである。これを人々は清兵衛の祟りと恐れたのであった。これが清兵衛を祭神とする和霊信仰になってゆくのである。5代藩主村候（むらとき）は大規模な社殿造営をし、その後民衆から広く信仰されていったのである。だが、伊達家ではこの事件の記録を隠滅して、藩には公式記録は何も残っていないのである。伊達家に残る1通の手紙（仙台4代藩主綱村が宇和島2代宗利宛に送ったもの）によると、「秀宗公が山家清兵衛と申すものをご成敗なさって以来・・・」とあり、上意討ちだったといわれるがこれには異論も多いのである。

この事件ののち、政宗と秀宗親子の関係は改善した。和歌の交歓など親密な父子となっていったのである。そして、この事件は宇和島藩にとって仙台藩からの真の自立と、藩政に一定の締めりをもたらすことになったのである。寛永13年（1636年）政宗は70年の生涯を閉じたが、仙台において行われた葬儀に秀宗は2男宗時とともに参列した。秀宗が仙台を訪れたのは生涯この1度きりだったのである。

6. 秀宗の晩年と吉田分知

政宗死去の翌寛永14年（1637年）島原の乱が勃発すると、幕命により派兵を行った。このころより秀宗は中風を患っていたという。病臥に臥すことも多くなったと思われる。長男の宗實（むねざね）は病弱で2男宗時が世嗣となっていた。正保3年（1646年）領内検地を実行して、これを基に年貢を定免制（じょうめん：固定化）とした。また、家臣の給与については地方知行制（給地制）から蔵米制（米の現物支給）に移行した。承応2年2男宗時が39歳の若さで没して、若干20歳の3男宗利が世嗣となった。このころから、豪商とともに新田開発を積極的に進めていたのである。

明暦3年（1657年）7月21日秀宗は宗利に家督を譲って引退した。ところが5男宗純（むねずみ）が秀宗の「宗純に3万石を分知する」との分知状を突然持ち出したのである。宇和島藩は和霊騒動以来の大事件になってゆくのである。当時の大名家では弟たちは養子へ出るか、臣下になるのが一般的であった。宗純についても3千石程度で決着が付いていた模様であった。驚いた宗利は仙台2代藩主忠宗と彦根藩主井伊直孝に、3万石を分知する考えのないことを力説した。一方の宗純と家老の

宮崎八郎兵衛も忠宗と直孝に訴えたのである。宮崎八郎兵衛はさらに、仙台一関藩主伊達兵部少輔（ひょうぶしょうゆう）宗勝に依頼した。彼は政宗の10男、秀宗の末弟で仙台藩一の実力者だった。のちの伊達騒動（寛文事件）の当事者であり、老中酒井雅楽頭（うたのかみ）と伊達家を2分する密約があったとも言われるが定かではない。井伊直孝は「伊達兵部が出てきたのでは仕方があるまい」と宗純を諭したのである。この結果、明暦3年（1657年）8月16日、伊予吉田藩3万石の分知が認められたのである。

吉田藩は肥沃な穀倉地帯を有し、宇和島藩との境界は複雑で飛び地もあって帰属を巡る紛争は絶えなかった。松野町目黒村の騒動は幕府まで訴え出たのである。宗利は高禄の家臣を吉田側に押し付けるなど両藩の対立は長く続いたのである。一方、宇和島藩は分知により穀倉地帯を失い石高も7万石になってしまった。秀宗の時代は7万石になっても、国持大名並みであり江戸城大広間詰めの待遇も変わらなかった。しかし、のちに表の石高を10万石に戻す努力をしている。万治元年（1658年）6月8日、秀宗は江戸の藩邸でその波瀾に富んだ生涯を閉じた。翌9日、宮崎八郎兵衛が、さらに3名の重臣が殉死したのである。殉死の禁止が幕府から口頭で発布されたのはこれより5年後、寛文3年（1663年）、4代将軍家綱の時のことであった。

7. まとめ

苦難の末に宇和島藩を築いた秀宗ではあったが、政宗の大きな影に隠れて世間にはあまり知られてはいないのである。また、地元でも尊崇を集めてもいないのが残念である。和霊騒動と吉田分知あたりが影響しているかもしれない。しかしながら、名君だったとの評価も少なからずあり、参勤交代の帰りに乗船した船が転覆しそうになった時にも堂々と振舞っていたとも言われている。和霊騒動はともかく、吉田分知について私は秀宗には何らかの意図があったと思うのである。すなわち、5男の宗純に2代藩主宗利にはない何かを見出しており、どこかの養子や臣下ではなく別家を起こすことで自分の、宇和島の血筋を守ろうとしたのではあるまいか。このような行動は外様の大藩で顕著であり、一方幕府も高禄の大名を削減しようとして事実上奨励していたのである。

和霊騒動は和解したとは言え、これ以後宇和島藩は仙台藩とは正式に別れて別の道を進むことになった。仙台への強烈な対抗心は7万石に転落した後も、何とか努力して10万石へ戻すことにより、江戸城大広間詰めの国持大名格、すなわち仙台藩とは同格の大名であることを維持することになった。

その気概は江戸時代を通じてずっと維持されて、仙台の風下に立つことを嫌ったのである。それから200年、幕末の8代藩主宗城（むねなり）は国事に奔走し10万石の大名ながら薩長土肥と並ぶ活躍をして、明治政府から侯爵に列せられた。戊辰戦争で佐幕派についた仙台藩は伯爵どまりだったので、ようやくこれを上回ったのであった。

主な参考文献】

「シリーズ藩物語 宇和島藩」（宇野幸男著：現代書館）

「シリーズ藩物語 伊予吉田藩」（宇野幸男著：現代書館）

「仙台藩ものがたり」（河北新報社編集局編）

「伊達政宗の手紙」（佐藤憲一著：新潮選書）

「兎の耳 もう一つの伊達騒動」（神津 陽著：創風社出版）

「えひめの記憶」(愛媛県生涯学習センター愛媛県史から)

この他、宇和島市立伊達博物館、仙台市立博物館、宇和島市ホームページ、高知市ホームページ
ウィキペディアの資料を参考にした

資料の写真は一部は筆者が撮影したが、そのほかは上記の資料のほかに、主にウィキペディアか
ら掲載した